

# 学習者言語にみる接続助詞「から」の談話機能の発達

木 山 三 佳\*

キーワード: 談話機能, 「から」, 発達, 日本語, 接続助詞

## 要 旨

接続助詞「から」(以下「から」と表す)には、節をつなぐ統語的な機能だけでなく、談話で多く見られる文末使用における終助詞のような機能もある。本稿では日本語学習者の「から」の談話機能が発達する過程を明らかにするために、新しい分析の枠組みを提示し、それに基づいて、学習者の来日直後と半年後の談話資料を母語話者の資料と比較し、その特徴を分析した。主節相当部の位置に注目して「から」の機能を、命題、テキスト1、テキスト2、談話管理1、談話管理2、表明とし、命題を除く五つを談話機能とすると、全体に占める談話機能の使用割合は、母語話者も学習者も顕著な違いはみられなかった。学習者の縦断比較では、日本語能力低位群でも上位群でも、母語話者の談話機能の使用比率に近づく傾向がみられた。

日本語能力低位群の来日直後の「から」の談話機能は、単文レベルの内容をまとめることと、言語能力を補うための、対話者の推測を喚起する標識となることだと思われる。

滞日期间での発達は、発話が並列的に長くなる方向に進み、意味解釈は聞き手に依存する。上位群では来日直後に、複数の接続表現がはいる、より複雑な内容をまとめる機能と、文レベルの長さを相手に働きかける機能を持っている。半年の滞日期间による「から」の談話機能の発達は、共話構造の複層化のはじまりや、接続詞との組み合わせによる論旨の明確化、などである。どちらも、ひとつの話題についての複数の発話からなるテキストを、接続詞などの他の接続表現と組み合わせてまとめる機能である。また、共話や談話展開などコミュニケーションの場をつくるストラテジーとして機能している。

以上の結果から、「から」の談話機能の発達は、①まとめる機能: 単文 → 複文(並列) → 複文 → テキスト、②相手依存 → 自己完結 → 共話 → 共話の複層化となると予想される。

## 1. はじめに

接続助詞「から」(以下「から」と表す)は理由・原因をあらわすための接続表現である。「から」には、節をつなぐという統語的な機能だけでなく、談話で多く見られる文末使用における終

\* KIYAMA Mika: 拓殖大学留学生別科非常勤講師。

助詞のような機能もある。日本語を生活の中では使わない環境にある学習者の場合、教科書や教室活動では統語的な機能を主に扱うので、「から」というひとつの形式で異なる機能を遂行できることは、理解できても自分で使用することは難しい。「から」の様々な機能は、来日して、生活の中で目的に応じた日本語の自然な使用に多く接触して習得が進むものと予想される。

「から」の習得過程は、第一言語では「から」は複文での使用よりも文末での使用が先行することが Clancy (1985) などでも明らかになっている。しかし、第二言語習得における「から」の研究では、機能別の習得や、使用実態などの調査はほとんどなされてこなかった。

そこで、本稿では日本語学習者の「から」の談話機能が発達する過程を明らかにするために、新しい分析の枠組みを提示し、それに基づいて、学習者の来日直後と半年後の談話資料を母語話者の資料と比較し、その特徴を分析する。

## 2. 先行研究

学習者言語における「から」の研究は少ない。同じ題での作文における学習者と母語話者の接続表現の使用実態調査(木山 2003)で、使用された接続表現の中で「から」が占める割合は、母語話者は 3.3% なのに対して学習者が 13% と、学習者の使用が母語話者よりも多かった。日本語の新聞社説を対象とした調査(西 1998)でも「から」の使用率は 1.4% であり、接続表現の中で「から」は母語話者では使用が少なく、相対的に学習者の使用が多い傾向がある。

学習者の「から」の使用が多い理由のひとつと考えられるのが、「して」節で表すべき「継起」関係をも「から」で表す点である。濱田(2000)ではひとつの文の中に、「から」を 2 度以上使う誤用例が多いことを指摘し、二つ以上の従属節をもつ文では「して」と「から」または「ので」を組み合わせることを教育現場で指導することを提言している。

習得研究で「から」は、機能アプローチによる過去・理由・条件表現の分析(横瀬 2001)や、談話的機能をもつ文末表現の発達(大塚 2001)など、分析項目のひとつとして扱われることが多い。学習者の使用頻度が高いわりに、「から」の習得が主要な研究主題とならなかったのは、「から」の意味・機能を統合的に分析できる枠組みがないことも影響していると思われる。

「から」の意味・機能には、文における位置によって主に二つあることが指摘されている。節と節の間に位置する「から」の接続助詞としての文法的な機能に基づく本来の用法は、前節を理由・原因・根拠として後節にむすびつけるものである。この機能における意味は、「ので」「して」のような理由を表す他の接続表現との比較という手法で多く研究されている。「ので」との比較では、事柄と理由の結びつけ方が「から」は主観的で、「ので」は客観的であるとする研究(永野 1952 他)がある。「して」との比較では、「から」と「して」には従属句の構造(南 1974, 田窪 1987)という統語的な違いがあり、そのため「から」には、判断の根拠という意味があり、働き

かけや説得のモダリティを表す(望月 1990) とされる。

一方、「から」節をうける主節に当たる節(以下、主節相当部、とする)がなくて、文末に「から」が位置した場合、「モダリティ的成分」(許 1997)、「省略述べかけ形式」(高橋 1993)、「聞き手目当ての発話」(水谷 2000)といわれ、終助詞と同じような聞き手に働きかける機能を「から」が担う。白川(1991)は、「本来の用法のひとつとして「背景の説明」という用法があり、「終助詞的」な用法はこの用法の変種と考えれば何も特別扱いする必要はなくなる(p. 254)」としているように、文法的機能が異なっているそれぞれの「から」の意味は「背景の説明」という用法で連続性があることを示唆している。

このように先行研究では、節と節を結ぶ、あるいは文末のような、位置の違いすなわち、文法的機能ごとに意味が研究されてきている。しかし、以下の点で「から」を統合的に分析するには、不都合が生じる。第一に、話し言葉では、「宿題あるから...明日は行けない...」のように「文末」か「文中」か、判断できないものがある。第二に、文末「から」には、主節相当部分が言語化されていないものと、文章あるいは談話のどこかで主節相当部分が言語化されているものがあるが、この2種類の機能の違いを説明ができない。第三に、対話者の「行けないの?」に対する返答としての「宿題あるから」や、「宿題あるから」の発話の直後に対話者が「行けないのだ」と先取り完結しているものなど、主節相当部と「から」節を対話者間で共同構成している場合も、文末の「から」として一緒に分類されてしまう。

では、なぜ文法的機能により「理由」や「相手に働きかける」など用法に違いが生じるのか。

「から」の意味は単独では成立しない。主節相当部の「ことがら」とのかかわりにおいて初めて、「から」は二つの事柄を結びつける装置として機能し、「理由」や「背景の説明」などの意味・用法が成立する。「から」と主節相当部のつながりが強く、聞き手の解釈が入る余地がないものは、「理由」という意味が成立し、逆に主節相当部とのかかわりが弱ければ聞き手の解釈の余地が広がるので、「理由」の意味が弱まり「背景の説明」や、「相手に働きかける」のような用法になるのではないだろうか。したがって「から」を統合的に分析するには、主節相当部とのかかわりを分析の枠組みとすることが望ましいと考える。

言語変化を扱う研究では、Iguchi (1998) が、主節相当部の内容に注目している。文末「から」の主節相当部には発話、行動、会話の含意があることから、「から」には接続助詞的な機能と終助詞的な機能が共存しており、「から」が言語変化の過程にあることを示している。

主節相当部の内容ではなく、従属節との関連付けに注目した研究では「から」に相当する英語の 'because' を対象とした Schleppegrell (1996) がある。学習者の作文にみられる because 英語母語話者の使用した because をその主節相当部との関係で、① その文内で関連付ける、② 以前のテキストと結局的なリンクをつくる、③ トピックとなる新しい情報を導入する、の三つに分類した結果、学習者は①が多く、母語話者は③が多かった。英語と日本語では類型論的な違い

があるので比較はできないが、分析手法は参考になる。

### 3. 目的および研究課題

初・中級の日本語学習者の使用する「から」の談話機能が、どのように発達するかの仮説をたてることを目標とする。そのために、新しい枠組みを提示し、それにもとづいて、同じテーマでの談話データで産出された「から」の機能別構成比率を母語話者のものと対照し、学習者の日本語能力による横断分析と、約半年の滞日期間での縦断分析をおこなう。

### 4. データおよび調査対象学習者

来日間もない日本語学習者の大学生に、初対面の日本語母語話者と、食事会の場所決めおよび、日本の交通機関についての感想を話してもらう。半年程度の日本での生活および学習期間を経た段階で、その同じ学習者に同じ相手と合宿の場所決めと、日本の若者について話をしてもらった。比較対照する日本語母語話者の談話データは学習者と同じそれぞれの話題について大学生各 10 名(男女 5 名ずつ)、合計 20 名に学習者と同じ相手と話してもらった。

すべての録音された談話データは統一した基準にそって文字化され、複数の日本語教育関係者によって相互に確認された。このデータは学習者が意見を述べる際の談話の特徴を調べるために収集されたもので、主張の根拠を述べる発話の中に、「から」を含む推論を表す接続表現が多く含まれている。この実験に参加した学習者は 18 名(男性 8 名、女性 10 名)で、学習者の母語は、英語 4 名、中国語 5 名、ネパール語 5 名、タイ語、韓国語、ポーランド語、広東語各 1 名である。事前に行った語彙・文法・読解の問題からなる日本語能力試験(1 級)に準拠したレベル判定テストの結果から、学習者 18 名を、判定テストの正解率が 70% 未満の学習者 8 名(日本語能力低位群)と、70% 以上の学習者 10 名(日本語能力上位群)に分ける。

## 5. 分 析

### 5-1. 分析の枠組み

「から」の談話機能の発達を調べるために、「から」と主節相当部の関係を分析の枠組みとする。「談話機能」は、狭義には文脈における焦点や結束性などの主題に関する概念を意味する。

本稿では分析する談話機能を、より広い意味で定義する。つまり結束性をつけるというテキスト構成機能も含めて、主張・否定・疑問・命令などの発話行為の効果を語用論的な解釈によって相手に及ぼす機能、会話におけるターンの受け渡しに係わる機能の全てをさすこととする。「か

ら」節と「から」が導く主節相当部の位置関係によって、「から」の機能を以下のように分類する。分類名は、Traugott & König (1991) を参考にした<sup>1</sup>。

(1) 「から節」が主節相当部の直前にある場合 命題的機能



節と節を結ぶという文法的機能に最も適しているこの位置での「から」は、「から節」と主節相当部の内容を命題的に原因・理由と結果・結論の関係で結ぶ。この「から」を命題的機能(以下 命題 と表示)として働くと考える。

例 1 (自転車通学は危なくないか、と聞かれて)車も人もあんまりいないから危なくはないですね  
(\_\_部分: から, \_\_部分: 主節相当部)

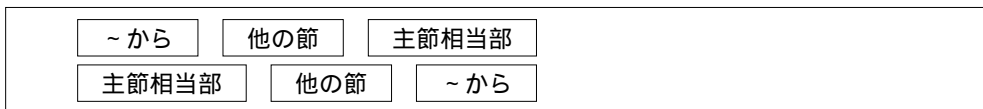
(2) 「から節」が主節相当部の直後にある場合 テキスト的機能 1



倒置文ともいわれる主節相当部の直後に「から節」が位置する場合である。「から」は前の発話に理由を補足して、二つの節もしくは文から成るまとまりのあるテキストをつくる機能を果たしている。この「から」をテキスト的機能(以下, テキスト 1 と表示)とする。

例 2 (先生はいいが学生は学校で禁煙すべき, との主張に対し, 先生はいいのか, と確認されて)  
んーいやですけど, いいんです。先生だから。( \_\_部分: から, \_\_部分: 主節相当部)

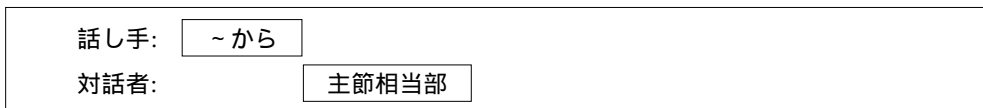
(3) 「から節」と主節相当部の間に他の節がはいる場合 テキスト的機能 2



「から節」と主節相当部の間に他節がはいることがある。他節とは接続表現をとまなう述語形式である。直接に主節相当部に連続する テキスト 1 よりも、「から」がテキストとしてまとめる範囲が広がっている。この場合をテキスト的機能 2 (以下, テキスト 2 と表示) とする。

例 3 (今後日本はもっと危険になるだろうという発話に続けて)殺人犯罪とかどんどん増えていくと思う。前はもっと欲しいものが簡単に手に入ったけど, 今はもう不景気で簡単に手に入らないから。( \_\_部分: から, \_\_部分: 主節相当部, .....部分: 他の節)

(4) 「から節」が対話者の発話である主節相当部の直前にある場合 談話管理機能 1



<sup>1</sup> Traugott & König (1991) は、ことばの機能的タイプとして、「何かについて語ることを可能にする言語的資源」を命題的成分, 「結束的な談話を作るための言語的資源」をテキスト的成分, 「発話の状況に対する個人の態度を表現するための言語的資源」を表明的成分, の三種類を設定した。そして通時的な言葉の機能的変化は, 命題的 > テキスト的 > 表明的の順に進むことを見出し, 語彙がより拡張された談話的な機能を持つようになるこの過程を「語用論的な変化」と呼んだ。

談話には、共話<sup>2</sup>と呼ばれる構造がある。共話構造の中でも、対話者の発話を補って文を完成させる発話を、先取り完結の発話と呼ぶ。日本語の談話では、接続助詞は、先取り完結の発話の始まりやすい形態素のひとつである。「から」の主節相当部が、自己発話ではなく、対話者によって発話される場合、「から」は談話管理の機能を持つとする。ここでの談話管理とは、相互行為で話し手がどのように開始、終結、ターンテキング、リペアなどを行うかを意味する。

母語話者と学習者の談話での、母語話者による先取り完結は、学習者の言語能力が十分ではない場合、フォリナートークの側面を持つ。この「から」を談話管理機能 1 (以下 談話管理 1 と表示) とする。

- 例 4 日本語学習者: (自分の国ではタクシーも古い、という発話に続けて)でも日本の運転手さんは、  
こう、何、白い手袋しているから、あの一、ちょっとー  
対話者: butler(執事)みたいですね ( 部分: から, 部分: 主節相当部)

(5) 「から節」が対話者の発話である主節相当部の直後にある場合 談話管理 2

対話者:	主節相当部
話し手:	~から

直前の対話者の発話が主節相当部となるように、理由を付け加えるものは、要求された以上の情報を提示しており、「拡張」と呼ばれる談話ストラテジーである。直前発話への共感を示し、賛成または否定など婉曲的に表す効果がある。この「から」を談話管理機能 2 (以下 談話管理 2 と表示) とする。

- 例 5 (旅行の候補地を絞り込んでいて、沖縄は 5 万円、他の候補地は 2 万円の予算だという話の後)  
日本語母語話者: だから、沖縄はやめて  
日本語学習者: 費用がかかるから。( 部分: から, 部分: 主節相当部)

(6) 主節相当部が具体的な言語表現では示されない場合 表明

~から	主節相当部なし
-----	---------

主節相当部が具体的な言語表現では示されない場合は、「から」は文脈を照応し、発話の状況に対する発話者の態度を表明する役割を持っている。この「から」を表明的機能(以下、表明と表示)とする。

- 例 6 (日本の学生に、言いたいことがあったら、に対して)  
言いたいこと? 大学生見てて? ま、色々あるからね、学生といっても

<sup>2</sup> 水谷(1980)では日本語の談話の特徴として「一人が自分の話を終わりまで述べて、次に他の一人が改めて自分の考えを述べ始めるより、二人が互いに補い合い、はげましあいながら話の流れを作っていく態度が基本になっている(p. 32)」と述べ、共話という言葉を使った。共話型の談話として本稿では先取り応答(話し手の発話が完結しない時点で行われる応答)、先取り完結(話し手の発話の続きを予測して聞き手が完結させる発話)、繰り返し(相手への共感に基づく話し手の発話の一部または全体のくりかえし)をとりあげる。

本稿では、命題的機能を除く、テキスト的機能、談話管理機能、表明機能が談話的機能と考える。命題的機能のように、主節相当部と「から節」が直結している場合、原因・理由を表すという意味には解釈の余地がない。しかし、表明機能のように、主節相当部がない場合は、聞き手の語用論的な解釈によって「から」の意味が決まる。主節相当部と「から節」が離れるほど、解釈の余地が生まれ、談話機能が強まると考える。したがって命題より、テキスト1、それよりもテキスト2、それよりも表明、と原因・理由の意味が弱まり、Traugott & König (1991) がいうところの語彙がより拡張された談話的な機能を持つようになる「語用論的な変化」が進んでいると考えられる。

## 5-2. 分析結果

各学習者の産出した「から」の産出数を、単位時間（20分）あたりにならして、数量的に集計すると表1のとおりである。

表1 「から」機能別使用数（単位時間20分あたり）

学習者	調査	命題	テキスト1	テキスト2	談話管理1	談話管理2	表明	学習者	調査	命題	テキスト1	テキスト2	談話管理1	談話管理2	表明
US2	1回目	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	TW5	1回目	1.7	0.0	0.0	0.0	0.9	0.9
	2回目	3.3	1.7	0.0	0.0	0.0	0.0		2回目	1.1	0.0	0.0	1.1	1.1	2.1
US1	1回目	2.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	TW4	1回目	1.3	1.3	0.0	0.0	0.0	0.0
	2回目	3.1	0.0	1.5	1.5	1.5	0.0		2回目	3.0	1.8	1.8	0.0	0.0	0.0
E1	1回目	7.3	0.9	0.9	5.5	1.8	2.7	TW1	1回目	4.0	0.0	1.3	0.0	0.0	4.0
	2回目	15.7	1.4	5.7	0.0	1.4	14.3		2回目	4.8	0.0	1.9	1.0	1.0	1.0
TW2	1回目	0.8	0.8	0.8	0.0	0.0	0.0	TW3	1回目	4.4	0.0	0.0	0.0	0.0	4.4
	2回目	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		2回目	2.9	1.4	2.9	0.0	0.0	0.0
NE5	1回目	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	NE3	1回目	10.5	0.0	0.0	1.1	3.2	7.4
	2回目	8.0	0.0	5.3	0.0	0.0	2.7		2回目	12.0	1.3	0.0	0.0	0.0	2.7
A1	1回目	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	NE4	1回目	1.3	0.0	0.0	0.0	0.0	2.5
	2回目	3.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		2回目	22.1	2.1	2.1	0.0	1.1	14.7
T1	1回目	6.7	2.2	1.1	0.0	2.2	0.0	NE2	1回目	12.0	2.0	3.0	0.0	3.0	5.0
	2回目	8.9	0.0	4.4	0.0	0.0	3.3		2回目	5.6	0.0	1.1	0.0	2.2	5.6
P1	1回目	2.0	2.0	1.0	1.0	0.0	0.0	NE1	1回目	10.0	5.0	6.0	0.0	0.0	6.0
	2回目	0.7	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0		2回目	11.4	1.4	2.9	0.0	0.0	7.1
低位群小計	1回目	19.6	6.0	3.9	6.5	4.0	2.7	K1	1回目	7.5	1.3	0.0	1.3	0.0	5.0
	2回目	44.2	3.1	18.5	1.5	3.0	20.3		2回目	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0
C1	1回目	4.2	0.0	1.1	0.0	0.0	1.1	上位群小計	1回目	56.9	9.5	11.4	2.3	7.0	36.2
	2回目	1.8	0.9	2.7	0.0	0.0	0.0		2回目	64.6	9.0	15.4	2.0	5.3	34.1

学習者は事前テストの成績の低い順に並べ、上段は1回目、下段は2回目のデータである。低位群と上位群の群ごとに小計をだしている。

### 5-2-1. 横断比較

低位群、上位群の群ごとの合計を機能別の百分率比でグラフ化し、日本語母語話者20名のデータを集計したものも併せて表示したのが、図1である。比率でみると、命題機能は、低位群と上位群の間であまり違いが見られない。低位群は、談話機能(テキスト・談話管理・表明)の中で、テキスト機能と談話管理機能の占める割合が高いが、上位群では表明機能の占める割合が高い。横断的には低位群よりも上位群の方が母語話者の構成比率に近く、縦断的には低位群も上位群も2回目の方が母語話者の構成比に近いことが分かる。

### 5-2-2. 低位群の縦断変化

低位群の縦断的な変化は、上位群の縦断変化と比べて著しい。その変化は主に、談話管理機能1のフォリナートークとしての対話者の先取り完結の減少である。これは発話に流暢さが増して、母語話者に依存せずに自分の発話を構成することができるようになったことを表している。また、全体に占めるテキスト1とテキスト2をあわせたテキスト機能の割合は変わらない。しかし約半年後2回目では主節相当部と「から」節の間に他の節(名詞修飾節を除く述語形式)がはいるテキスト2の割合が増えている。母語話者の使用比率と比べても、テキスト2は大きい割合である。

図2は、テキスト2にあたる「から節」と主節相当部の間に、他の節がいくつ入っているかを示したものである。横軸に、当該「から節」と主節相当部の間に入っている他の節の数、縦軸に、単位時間当たりの使用数をとった。横軸の1節は、「～から～から主節相当部」のように、間にはいつている節が「から」の場合を『1節(から)』と表し、「～から～して主節相当部」のよう

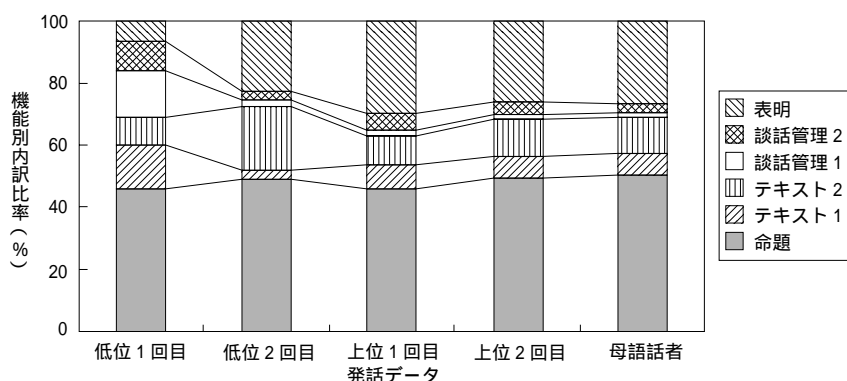


図1 「から」機能別構成比率



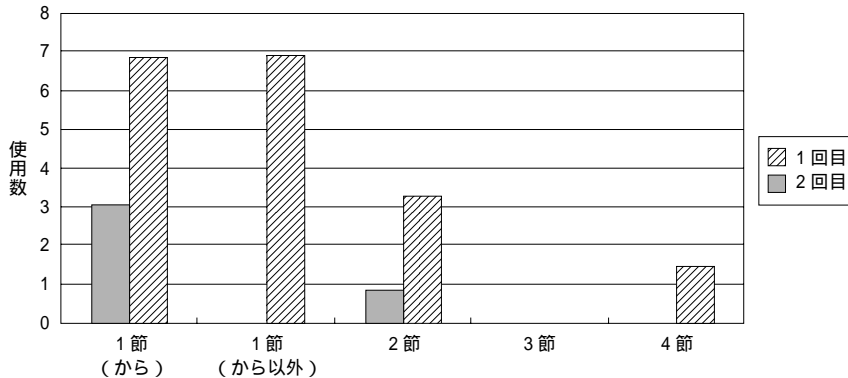


図2 テキスト2における「から節」—主節相当部の節数

に、間にはいつている節が「から」以外の接続表現である場合を『1節(から以外)』と表した。それぞれ左に1回目、右に2回目を表し、比較した。

1回目は、テキスト2で「から」を続けるものが4例中3例である。全て理由の言い換え、あるいは理由の並列と思われるもので、二つの「から」節の間に従属関係がない。

例7 (自転車に乗れば早いのに、といわれて)

ちょっと怖いです。東京が知らないから。道知らないから。(.....部は、テキスト1)

2回目は、「から」による理由の並列が増加する。節が増え、発話が長くなり、「から」節と主節相当部の間以外にも、節ははいる。

例8 (日本の若者は子供っぽいと思うことはないか、と聞かれて)

それは—、例えば、子供っぽい若者は—、アメリカとかヨーロッパに行ったら—、問題になるかもしれないけど—、日本だから—、他の若者も(笑いながら)そうだから—、いいんじゃないですか? (.....部は 命題)

「から」節と主節相当部の間に他の節が1種類はいることもあるが、「から」とその節が従属関係になることはなく、それぞれが主節相当部にかかっている。

例9 (日本人の仕事観も昔と変わってきているという意味の発話に続けて)

そういう考え方が就職、サラリーマンだけでなく、いろいろな仕事があるから、サラリーマンといっても、なんか全部会社、会社人になっちゃうわけじゃないから、家族も自分のこともなんかいろいろ考えながらやっていけばいいと思います (.....部は他の節)

主節相当部との間に4節はいつている発話例は例10である。「から」が連続しているが、それぞれの「から」節の関係が並列なのか従属関係があるのか明確ではない。その結果、構造的に論旨が伝わらない。濱田(2000)が作文の誤用例として多く見られたと指摘している構造に似ており、中間言語における「から」の発達の途上では書き言葉でも話し言葉でも「前後のつながりがわかりにくい」「長すぎる」という特徴が見られる可能性がある。

例 10 (日本の若者について意見はありませんか、に対して)

いろいろな国の価値観が違うから—社会が違うから—批判してはいけないと思います。  
 なぜかと言うと、人間は—人間だからどこ行っても同じから—、まあ日本の社会が、日本の  
 若者は、日本に住んでるから—、この社会に育てられているから (部は他の節)

日本語母語話者の例を見ると、「から—から」の形になるものもあるが、並列的な「から」の連続は 1 例である。「から—と」の形をとるものが最も多く 3 例ある。主節相当部分が「と」の従属節を持つ (C1 から C2 と C3) の構造になっている。

例 11 だから、基本的にモラルはあるんだから、まあそれぐらいはわかってしゃべってだから、こんなことやってしゃべっているから、まあそれはいいんじゃないかな

例 12 ま、その留学生の立場から見れば、やっぱり、勉強しにわざわざ日本まで来てる訳ですからね、それで、ま、やっぱり授業中しゃべってたりするとね、やっぱり騒がしいとそいでね、こっちまでやる気—なくしちゃうし—

例 13 何か—、いろいろな物がもうほんとに溢れてるから—何かそういうもの—がやっぱりいっぱいあると—、そういうものにやっぱり興味が行っちゃって—、

例 14 交通機関は、それが本数とか少ないし、一つがつぶれたら代えもきかないから—ちょっと一個所ずれこむと、もうがたがたになっちゃう

このことから、学習者の「から」の並列はやはり中間言語的な特徴であると考えられる。

### 5-2-3. 上位群の縦断変化

上位群では、機能別の使用比率に目立った変化がない。共話構造の複層化や接続詞の併用による論旨の明確化、などの特徴がみられた。

#### (1) 談話管理機能における特徴——共話構造の複層化のはじまり

母語話者では、復層的な共話構造に 談話管理 2 の「から」がみられる。

①, ③ をうけて ④ が先取り完結をしている。矢印の「から」は「ここでは勉強する人いないでしょう」を主節相当部とする 談話管理 2 である。さらに、⑥ の「そう考えると」が ①~⑤ の共話部分と照応し、もう一度 ⑦ が ⑥ を先取り完結する。こうして ①~⑦ まで連続する、「先取り完結」が 3 回続く共話構造ができています。

例 15 (旅行の候補地を絞り込む場面で)

日本人大学生:	① でもやっぱり A プランの沖縄だとたしかにいいんですけど	}
対話者:	② うん	
日本人大学生:	③ やっぱり、飛行機とかで—、疲れてしまうような気がしてしまうんで	}
対話者:	④ うーん、ここでは勉強する人いないでしょう	
日本人大学生:	⑤ そう、どうしても遊びたくなってしまうから—	} (先取り完結)
対話者:	⑥ そうですね—、 <u>そう考えると</u> 、まあ—、沖縄はちょっと	
日本人大学生:	⑦ はずしくなる	} (先取り完結)
対話者:	⑧ うーん、そうですね—ちょっと論外って感じですね—	

例 16 は上位群学習者の来日直後 1 回目の 談話管理 2 の例である。二つの共話構造が最も近くで見られた例であるが、例 15 と比較すると、二つの共話の間にはなにも結束性がないことがわ

かる。

例 16 (自転車を利用する学習者と自転車放置問題について話す場面で)

対話者: ちゃんとじゃあ、あの一道に置きっぱなしにしちゃうってことはない } (先取り応答)  
 学習者: あーそれはないです  
 対話者: ふーん  
 学習者: うん  
 対話者: 一杯置きっぱなしになってる自転車がありますよね } 談話管理 2  
 学習者: → あ、はいそれはまたとられたらお金払わなきゃなんないから

例 17 は、上位群学習者の 2 回目の 談話管理 2 の例である。母語話者が上位群学習者の発話の(繰り返し)をし、それを「だから」で照応する ⑥ に対して、学習者は 談話管理 2 で理由を付加している。

例 17 (なぜ日本の大学生は授業で意見を述べないのか、という話題で)

対話者: ① うちの中で議論します?  
 学習者: ② うちの中で?  
 対話者: ③ ええ、たとえば、  
 学習者: ④ あんまりしないですね }  
 対話者: ⑤ しないですよ (繰り返し)  
 学習者: ⑥ あーあー  
 対話者: ⑦ だから同じ大学の人とは議論はしない。 } 談話管理 2  
 学習者: → ⑧ うん、そうそう、まあ、言わなくてもわかってるって感じだからね  
 対話者: ⑨ そうそうそうそう  
 学習者: ⑩ ああ、それは日本とは変わんないか、ネパールも

上位群学習者でも二つの共話に結束性がみられるのは例 18 だけであるが、このあと共話構造の複層化が増える方向に発達する可能性を示す例といえる。

## (2) 表明機能における特徴——接続詞の併用

例 18 では、1 例目も 2 例目も「から」には主節相当部がない。それぞれ原因・理由を表すという本来の意味が非常に薄い。このような終助詞的な「から」について白川 (1991) は、「そのことを承知しておいてください」という背景説明の言外の意味があるとした。2 例目の「から」の文頭の「ですから」も説明開始の談話標識である。主節相当部まで言わなくても、発話の最初と最後の標識で、不同意の意図が明確になる。

例 18 (学習者が日本の若者は社会に対して意見を言わないが、それは無責任だという意見をのべ、それに対して対話者は、意見を言ったところで社会は変わらない、と反論している場面)

対話者: うん、反応しても変わらないと思っている。  
 学習者: → や、それは変わるか変わらないかは別の話で、まず反応しなきゃ何も起こらないから。  
 対話者: うん、でも今までの経験から、  
 学習者: → ですから、今そのガイドラインとか作ったのは、今の親父たちですから。  
 対話者: そうです。  
 学習者: でも絶対苦労するのは今の若い人たちですね。

接続詞を伴う 表明 の割合を図 3 に表した。

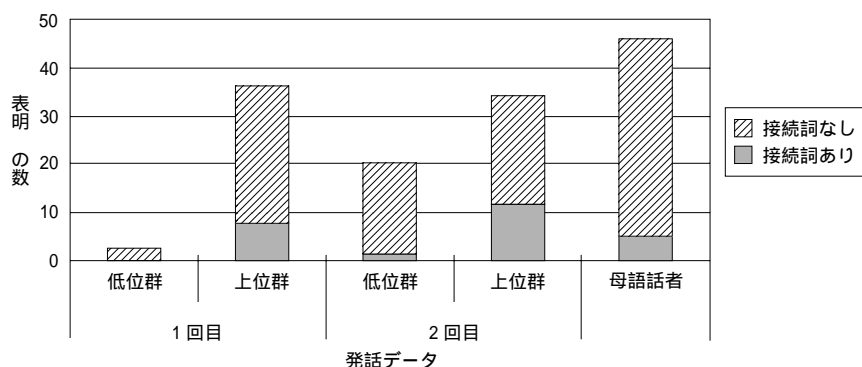


図 3 表明 における接続詞の有無

1 回目の低位群の 表明 , 1 回目の上位群の 表明 , 2 回目の低位群の 表明 , 2 回目の上位群の 表明 , 母語話者の 表明 を,それぞれ接続詞があるものと,接続詞がないものを分けて数を表した。1 回目と 2 回目それぞれの横断比較では,接続詞が使用された割合は,低位群より上位群で高い。低位群でも上位群でも縦断比較すると,1 回目よりも 2 回目のほうが,接続詞を使用した割合が高い。学習者では接続詞との併用によって,発話の意図が明確化する方向に変化が見られる。

使用された接続詞を見ると,学習者の 1 回目はすべて「でも」である。反論を和らげるために主節相当部を省略した 表明 を利用しながら,接続詞「でも」によって,反論であることを明示する方法がストラテジーとなっているものと予想される。

2 回目には,「でも」「だけど」のような逆接だけでなく,「だから」「それで」「で」などの順接も使用されている。しかし,例 18 のように「だから」も「説明の開始」を意味する談話標識として,主張を和らげる 表明 に主張の展開を導く接続詞を組み合わせしており,広い意味では「でも」の使用と同様の効果をもつ,ストラテジーとしての使用と思われる。しかし,母語話者のデータでは,接続詞が 表明 で使用される割合は学習者のそれよりも低い。使用された接続詞は「でも」が 3 例と,「そうすると」「だったら」であった。母語話者は接続詞の使用以外の方法で主張を導いている可能性がある。

上位群学習者では条件をあらわす接続詞の使用がみられなかった。「だから」「それで」などの順接は,事柄を主観的につなぐので,話し手の主張性が強くなるが,条件を表す接続語の場合,事柄そのものが必然的にそうなるという意味を持つため,発話意図は明確であるが,主張性が順接よりは強くない。表明 での接続詞の使用による発話意図の明確化は,逆接から順接へと発達し,さらに条件を表す接続詞の使用へと変化していく可能性がある。

## 6. 考 察

主節相当部の位置に注目した「から」の機能分類を表2のように設定した。

表2 「から」の機能分類

主節相当部の位置	文・談話の構造	機能	「から」例文
直後自己発話	～から主節相当部	命題	雨が降ったから 家にいた
直前自己発話	主節相当部～から	テキスト1	家にいた 雨がふったから
自己文脈	主節相当部他節～から	テキスト2	家にいた 風邪もひいていたし 雨がふったから
	～から他節主節相当部		雨が降ったから 風邪もひいていたし 家にいた
直後相手発話	「～から」「主節相当部」	談話管理1	「雨が降ったから」（「君は家にいたんだ」）
直前相手発話	「主節相当部」「～から」	談話管理2	（「君は家にいた」）「雨が降ったから」
具体的表現なし	～から	表明	雨が降ったから...

このうち テキスト1 , テキスト2 , 談話管理1 , 談話管理2 , 表明 を談話機能として、母語話者のデータと比較することで、学習者言語の「から」の談話機能の発達の特徴を調べた。全体に占める談話機能の使用割合は、母語話者も学習者も顕著な違いはみられなかった。学習者の縦断比較では、日本語能力低位群でも上位群でも、母語話者の談話機能の使用比率に近く傾向がみられた。

### 6-1. 日本語能力低位群における「から」の談話機能の発達

#### 6-1-1. 日本語能力低位群の来日直後の「から」の談話機能

談話機能の内訳比率を比較すると、日本語能力低位群の縦断1回目の比率は他とは大きく異なり、談話管理 の比率が高く 表明 の比率が低い。相対的に比率が高くなっている 談話管理1 , 談話管理2 , テキスト1 は、「から」節と主節相当部分を隣接した別々のまとまりとして産出するものである。

この段階での、「から」の談話機能は、ひとつには単文レベルの内容をまとめることである。二つの述語部分をもつ複文をひとまとまりのものとしてスムーズに産出するだけの言語能力が足りない学習者の場合でも、「から」節と主節相当部分をわけた上で続けることで、原因・理由と結果・帰結を結んで表現できることがわかる。

もうひとつの談話機能は、言語能力を補うための、対話者の推測を喚起する標識となることだと思われる。学習者が表現したい内容に適した語彙や文法項目にわからない点があっても、対話者がいれば、文脈、主題となる名詞、「から」などをもとに発話意図を推測して、コミュニケーションが成立する。さらに、学習者にとっては場面に即した言語表現のフィードバックによって、

学習機会にもなる。

#### 6-1-2. 日本語能力低位群の学習者の約半年の滞日による「から」の談話機能の発達

低位群の縦断変化を特徴づけるのは、談話管理機能の比率の低下と、テキスト2の比率の上昇でどちらも著しい変化である。談話管理機能の低下は、「から」節と主節相当部分をつなげて発話できるだけの言語能力が発達したためと考えられる。テキスト2の増加は、従属節の並列的な列挙による。低位群の学習者は、「から」節を2回繰り返す例が多くみられたが、母語話者では「から」の並列による理由の列挙は1例のみであり、「から」節の連続は中間言語的な特徴と思われる。また、「から」節以外の節が使用されている場合も、「から」節とその節に従属関係があるものはみられない。

低位群の発達は、発話が並列的に長くなる方向に進む。「から」節と主節相当部が無限に遠くなったのが、主節相当部の省略、すなわち表明であると考え、意味の解釈は聞き手の類推に依存している。

#### 6-2. 日本語能力上位群における「から」の談話機能の発達

##### 6-2-1. 日本語能力上位群の来日直後の「から」の談話機能

上位群は、低位群と比較すると、「から」は複文レベルの文法構造をかなり習得しているものと考えられる。発話データでも複文の内容を表現できている。一方で、主節相当部が言語表現化されない「表明」の使用も多い。上位群では来日直後に、複数の接続表現がはいる、より複雑な内容をまとめる機能と、文レベルの長さを相手に働きかける機能を「から」が持っている。

##### 6-2-2. 日本語能力上位群の学習者の約半年の滞日による「から」の談話機能の発達

使用機能構成比率の縦断的变化はわずかである。母語話者の使用談話機能内訳比率に近づく。上位群で顕著な変化は、低位群や上位群の来日直後に見られた文レベルの変化ではなく、共話構造の複層化のはじまりや、接続詞との組み合わせによる論旨の明確化、などである。

どちらも、ひとつの話題についての複数の発話からなるテキストを、接続詞などの他の接続表現と組み合わせてまとめる機能である。また、共話や談話展開などコミュニケーションの場をつくるストラテジーとして機能している。

#### 6-3. 「から」の談話機能の発達についての仮説

以上の結果から、「から」の談話機能の発達は、以下になると予測される。

	まとめる機能	働きかける機能
日本語能力低位群	単文レベル → 複文レベル(並列)	相手依存 → 自己完結
日本語能力上位群	複文レベル → テキスト	共話 → 共話の複層化

## 7. 日本語教育への示唆と今後の課題

滞日半年で、「から」の談話機能の発達は、日本語母語話者に近づく方向で進んでいた。このことから、日常会話で「から」を使用することで対話者との発話の共同構成を促したり、言語表現の学習機会を提供したりすると思われる。教室活動で、自然なコミュニケーション活動を取り入れることが役立つものと思われる。

今後、さらに期間を延ばし、データを収集し、同時に使用されることが多い接続表現の組み合わせや、他の推論を表す接続表現との関係についても調査したい。

## 付 記

本研究で分析対象としたデータは、科学研究費補助金(基盤 B)を受ける研究「日本語学習者と日本語母語話者の談話能力発達過程の研究——文章・音声の母語別比較——」(代表者: 水谷信子, 課題番号: 10480049)において収集したものの一部である。

## 参 考 文 献

- 大塚純子(2001)「日本語学習者の聞き手働きかけ発話の変化」『明海大学別科 10 周年記念論集』42-51。  
 木山三佳(2003)「連用修飾節を構成する接続助詞類の使用実態——作文データベースを用いて——」『言語文化と日本語教育』25, 13-25, お茶の水女子大学日本言語文化学会。  
 許 夏玲(1997)「文末の「カラ」について——本来的用法から派生的用法へ——」『ことばの科学』10, 73-86, 名古屋大学言語文化部言語文化研究委員会。  
 国立国語研究所(1955)『談話語の実態』。  
 白川博之(1991)「「カラ」で言いさす文」『広島大学教育学部紀要』2, 39, 249-255。  
 永野 賢(1952)「「から」と「ので」はどう違うか」『国語と国文学』29-2, 30-41。  
 高橋太郎(1993)「省略によってできた述語形式」『日本語学』12, 18-26。  
 田窪行則(1987)「統語構造と文脈情報」『日本語学』6-5。  
 西由美子(1998)「新聞社説における接続表現の日英対象研究」, 平成 9 年度お茶の水女子大学人文科学研究科日本語文化専攻修士論文。  
 水谷信子(1980)「外国語の習得とコミュニケーション」『言語生活』8, 28-36。  
 ———(2000)「日英語の談話の展開の分析——話し言葉における接続表現を中心として」『応用言語学研究』2, 139-152。  
 望月通子(1990)「条件づけをめぐる——「理由」の「シテ」と「カラ」——」『日本学報』9, 33-49。  
 濱田美和(2000)「原因・理由を表す接続表現——中上級日本語学習者の誤用例分析を通して——」『IDUN』14, 203-222, 大阪外国語大学デンマーク語・スウェーデン語研究室。  
 南不二男(1974)『現代日本語の構造』, 大修館。  
 横瀬智美(2001)「習得研究における機能アプローチ(平成 12 年度第 8 回日本語教育学会研究集会発表要旨)」『日本語教育』109, 142。

- Clancy, P. 1985. The acquisition of Japanese. In Slobin, D. I. (Ed.) *The cross-linguistic study of acquisition: The Data*, vol.1, Hillsdale, NJ: Lawrence Elbaum Associates, 373–524.
- Ford, C. & Mori, J. 1994. Causal markers in Japanese and English conversations: A cross linguistic study of interactional grammar, *Pragmatics*, 4: 1, 31–61.
- Givon, T. 1979. *On understanding grammar*. New York, Academic.
- Iguchi, Y. 1998. Functional Variety in the Japanese Conjunctive Particle *Kara* ‘Because’, In Ohori, T. (Ed.) *Studies in Japanese grammaticalization — Cognitive and Discourse Perspectives —*, Kuroshio, 99–128.
- Onodera, N. O. 1995. Pragmatic change in Japanese: Conjunctions and interjections as discourse markers, Ph.D. dissertation, Georgetown University.
- Pfaff, C. W. 1987. ‘Functional Approaches to Interlanguage’, In Pfaff, C. W. (Ed.) *First and Second Language Acquisition Processes*, Cambridge, Mass. Newbury House, 81–102.
- Schleppegrell, M. J. 1996. Strategies for discourse cohesion: Because in ESL writing, *Functions of Language*, 3 (2), 235–254.
- Traugott, E. C. & König, E. 1991. Themantics — pragmatics of grammaticalization revised. In Traugott, E. C. and Heine, B. (Ed.) *Approaches to grammaticalization I*, Amsterdam: John Benjamins, 89–218.